

「運動部活動のあるべき姿に関する考察」
Examination of what sports club activities should be
1K03A012-1 氏名 伊佐治美希
指導教員 主査 友添秀則 先生 副査 宮内孝知 先生

【研究動機及び目的】

運動部活動（以下「部活動」と略す）は『高等学校学習指導要領保健体育編』に「体力の向上や健康の増進にも極めて効果的」、「豊かな学校生活を経験する活動」と記載され、部活動の意義が認められている。しかし一方で部活動は、必修教科や特別活動（カリキュラム）に対して、教育課程外の活動とされるという難しい位置づけにある。そのため、学校、教員によって部活動の捉え方や関わり方は様々に異なる。

また部活動は、現状として勝利至上主義に走り、商業主義に圧倒され、それゆえに「落ちこぼれ」や「体罰」を含めた様々な問題を抱えている。こうした部活動問題の中には、約 100 年前から変わらないままのものも多く、その理由として、生徒や教員、保護者らの多くが部活動の良い面しか見ておらず、問題意識や存在意義を突き詰めることがないためではないかと思われて仕方ない。

実際私自身は、これまで部活動に対して肯定的な見方を強く持っており、部活動のおかげで多くのことを学び、人間的に成長できたという、プラスイメージが強かった。しかし、大学で教員を目指して学ぶうちに、部活動のあり方やその意義について考え直すようになった。このことから本研究は部活動のあるべき姿に迫り、部活動に対する考えをまとめる機会とした。

本研究の目的は以下の 2 点である。

- ・部活動問題解決のための提案をする。
- ・あるべき部活動の姿を明らかにする。

【研究方法】

本研究は、関連文献の講読によって行う。また、文部省（現文部科学省）発表のアンケート調査報告である『運動部活動のあり方に関する調査研究報告』（1997 年）に考察を加えて問題点をつきつめ、さらに、現職の部活動顧問教員（高校）との対談などを通して部活動のあるべき姿について考察していく。

【各章の概要】

第 1 章では、部活動の成立過程について概観する。

第 1 節においては現在の部活動の起源となった明治時代の「校友会活動」の成立までの過程を把握する。第 2 節

では、大正から昭和前期に軍事化の影響によって校友会活動が「鍛錬部」や「国防部」へと名称やその活動実態を変更していく過程について概観していく。第 3 節は戦後の学習指導要領の改訂における部活動の位置づけの変化に着目し、部活動が「クラブ活動」と称され、その後現在の「部活動」へと至るまでの歴史的変遷について把握する。

第 2 章では、文部省（現文部科学省）の『運動部のあり方に関する調査研究報告』（1997 年）と、実際に県立 K 高校の内規を元に部活動の現状の問題点について指摘する。

第 1 節では、生徒の部活動に対する考え、悩み、活動状況を指摘し、第 2 節では、顧問教員の指導上の悩みについて、現職の顧問教員との対談を中心に指摘する。第 3 節では、中学と高校の運動部入部者率（『運動部活動のあり方に関する調査研究報告』）から現状の部活動で生みだされる「落ちこぼれ」の問題について指摘する。

第 3 章では、第 2 章において指摘された問題点を受け、それらの問題解決に向けて考察を加える。

第 1 節では、部活動の「存在理由」や「意義」を明らかにし、部活動が学校教育における教育活動であることを確認する。第 2 節では、現職の顧問教員の取り組みを参考にしながら、これまでの「古い部活動観」から、どのようなプロセスによって「新しい部活動観」へとパラダイム転換していくことが可能なのかを考察する。第 3 節は、部活動改革のための教員・学校の果たすべき役割について考察する。

結章では、これまでの各章を受け、部活動の意義についてまとめ、今後部活動がどうあるべきか提言する。

【結論】

本研究を通して、以下の事柄が明らかになった。

- ・部活動問題の解決には、「古い部活動観」を打破することが不可欠である。
- ・部活動は「教育活動」であり、生徒の人間的成長を期待して実施されるべきである。